

【 復活のトロパリ 第1調 】

きゆ うせ え いしゆよ、 イウ デ ヤ の ひ と は か を
 救 世 主 人 墓
 ふ うじ て 、 へ い そ つ なんぢ の い さ ぎ よ き み を
 封 兵 卒 爾 潔 軀
 ま も る と き 、 なんぢ は み っ か め に ふ く か つ
 守 時 爾 三 日 目 復 活
 し て 、 せ か い に い の ち を た ま え り 。
 世 界 生 命 賜
 ゆ え に て ん ぐ ん は なんぢ い の ち を ほ ど こ す の
 故 天 軍 爾 生 命 施
 し ゆ に よ べ り 、 ハ リ ス ト ス よ 、 こ う え い は
 主 呼 光 榮
 なんぢ の ふ く か つ に き し 、 こ お う え い は なんぢ
 爾 復 活 歸 し 光 榮 爾
 の く に に き す 、 ひ と り ひ と を い つ く し む
 國 歸 獨 人 慈
 し ゆ よ 、 こ う え い は なんぢ の お も ん ぱ か り に
 主 光 榮 爾 慮
 き す 。

【 正教の主日のトロパリ 第2調 】

じん じ な る ハ リ ス ト ス か み よ 、 わ れ ら なんぢ の し
 仁 慈 神 我 等 爾 至

じょうなるせいぞうにふくはいして、わがしよざ
 淨 聖 像 伏 拜 我 諸 罪
 いのゆるしをもと おむ、けだしなんぢ
 赦 求 蓋 爾
 はそのつくりしものをてきのどれいよりすく
 其 造 者 敵 奴 隷 救
 わんために、あまんじてみにてじゅうじかにのぼり
 爲 甘 身 十 字 架 升
 たまえり。ゆえにわれらかんしゃしてなんぢ
 給 故 我 等 感 謝 爾
 によぶ、せかいをすくわんためにきたりし
 呼 世 界 救 爲 來
 わがきゆうせいしゅよ、なんぢはしゅうじんを
 我 救 世 主 爾 衆 人
 よろこびにみてたまえり。
 欣 喜 満 給

【 正教の主日のコンダク 第2調 】

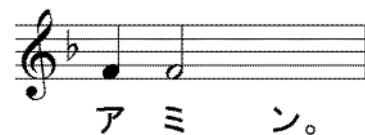
こうえいはちちとことせいしんにきす、い
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今
 まもいつもよよに、アミン。
 何 時 世 世
 しょうしんぢよよ、かぎられぬちちのことばは
 生 神 女 限 父 言

なんぢよりみをとりにておのれをかぎいり、
 爾身取己限
 けがされたるぞうをしんせいなるびれいにあ
 汚像神聖美麗合
 わせて、いにしえのさまにかえしたま
 古状復給
 えり。われらはすくいをうけとめて、
 我等救承認
 おこないとことばをもってこれをあらわあ
 行言以之顯
 す。

司祭) (黙誦： ^{せい かみ せいじゃ うち いこ} 聖なる神、^{せいさん こえ もつ かしょう} 聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
^{さんえい ことごと てんぐん ふくはい ばんぶつ む ゆう} ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と
^{ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ} なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
^{ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい} 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を^す行^{おこな}う者を棄てずして、其救の爲に痛悔
^{た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ と き おい なんぢ せい} を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
^{さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの} る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と
^{しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ} なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
^{もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ} 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
^{せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい しょう} を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生
^{しんぢょ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ} 神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る
聖 神 聖 勇 毅 聖

じょう せい の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い
聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じょう せい の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、
聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じょう せい の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
歸 今 何 時 世 世

せ い な る じょう せい の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せいなるかみ、せいなるゆう
 聖 神 聖 勇
 き、せいなるじょうせいのものよ、われらを
 毅 聖 常 生 者 我 等
 あわれめよ。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 プロキメン 提綱 大齋第一主日第 4調 諸祖の歌 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主、我が先祖の神よ、爾は讃揚せられ、爾の名は世に讃美讃榮せら
 る、

しゅ わがせんぞのかみよ、なんぢはさんよう
 主 我 先 祖 神 爾 讃 揚
 せられ、なんぢの名はよよにさんびさんよおせ
 爾 名 世 世 讃 美 讃 揚
 られん。

誦經) 蓋爾は凡そ我等に行いし事に於て義なり、

しゅ わがせんぞのかみよ、なんぢはさんよう
 主 我 先 祖 神 爾 讃 揚

せられ、なんぢのな は よよにさんびさんよ おせ
爾 名 世 世 讚 美 讚 揚
 られ ん。

誦經) しゅ わ せんぞ かみ なんぢ さんよう 主、我が先祖の神よ、爾は讚揚せられ、

なんぢのな は よよにさんびさんよ おせられ ん。
爾 名 世 世 讚 美 讚 揚

【 アポストロロス 使徒經 329 半端 エウレイ書 11 章 24 節～26、32～12 章 2 節 】

司祭) えいち 睿智、

誦經) せいしと じん たつ しょ よみ 聖使徒パヴェルがエウレイ人に達する書の讀、

司祭) つつし き 謹みて聽くべし、

誦經) けいてい しん よ ちょう およ むすめ こ と な いな 兄弟よ、信に由りてモイセイは長ずるに及びて、ファラオンの女の子と稱えらるるを辭

ざんじ ざいあく たのしみ う むしろかみ たみ とも くる ねが みて、暫時の罪惡の樂を享けんよりは、寧神の民と共に苦しまんことを願い、ハリ

よ そしり たから さら おおい とみ おも けだしかれ むくい ストスに縁る誹毀を、エジプトの寶よりも更に大なる富なりと意えり、蓋彼は賞を

あお のぞ われまたなに い も 仰ぎ望めり。我復何をか言わん、若しゲデオン、ヴァラク、サムプソン、イエツファイ、ダヴ

およ た よげんしゃ こと の われ ときた かれら しん よ イド、サムイル、及び他の預言者の事を述べんには、我に時足らざらん。彼等は信に由り

しょこく したが ぎ おこな きよやく う しし くち ふさ ひ いきおい け つるぎ は て諸國を従え、義を行い、許約を受け、獅の口を箝ぎ、火の勢を滅し、劔の刃を

き よわ つよ たたかい いさ いほう ぐん ついや おんな そのししや ふく 避け、弱きよりして強くせられ、戰に勇み、異邦の軍を潰せり、婦は其死者を復

かつ もの う またあるもの さら よ ふくかつ え ため まぬが ほつ むご 活せし者として受けたり、亦或者は更に善き復活を得ん爲に、免るるを欲せずして、酷

ころ た もの あざけり むち またなわめ ひとや こころみ う いし う く戮されたり、他の者は嘲弄と鞭扑と、又縲紲と囹圄との試を受け、石にて撃たれ、

のこぎり ひ ごうもん あ やいば ころ めんよう さんよう かわ き るろう 鋸にて解かれ、拷問に遇せられ、刃にて殺され、綿羊と山羊との皮を衣て流離し、

きゅうぼう かんなん しんく しの せかい お た えざるもの こうや さんれい がんけつ ちくつ 窮乏、患難、辛苦を忍び、世界に置くに堪えざる者は、曠野、山嶺、巖穴、地窟に

さまよ これらみなしん よ しょう きよやく ところ え けだしかみ 徨えり、此等皆信に由りて證せられたれども、許約せられし所を獲ざりき、蓋神は

われら こと おい さら よ こと よけん かれら われら とも まつた え
我等の事に於て更に善き事を預見せり、彼等は我等と偕にせずしては全きを得ざらん

ため ゆえ われら しょうしゃ か くも ごと おお かこ およそ おもに われら はば つみ
爲なり。故に我等も證者の斯く雲の如く衆きに圍まれて、凡の重負と我等を阻む罪

とを去り、忍耐を以て、我等の前に在る馳場を趨りて、我等の信の首、及び成全者

イススを仰ぎ望むべし。

(比較用 口語訳) 信仰によって、モーセは、成人したとき、パロの娘の子と言われることを拒み、罪のはかない歓楽にふけるよりは、むしろ神の民と共に虐待されることを選び、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる富と考えた。それは、彼が報いを望み見ていたからである。このほか、何を言おうか。もしギデオン、バラク、サムソン、エフタ、ダビデ、サムエル及び預言者たちについて語り出すなら、時間が足りないであろう。彼らは信仰によって、国々を征服し、義を行い、約束のものを受け、ししの口をふさぎ、火の勢いを消し、つるぎの刃をのがれ、弱いものは強くされ、戦いの勇者となり、他国の軍を退かせた。女たちは、その死者たちをよみがえらせてもらった。ほかの者は、更にまさったいのちによみがえるために、拷問の苦しみに甘んじ、放免されることを願わなかった。なおほかの者たちは、あざけられ、むち打たれ、しばり上げられ、投獄されるほどのめに会った。あるいは、石で打たれ、さいなまれ、のこぎりで引かれ、つるぎで切り殺され、羊の皮や、やぎの皮を着て歩きまわり、無一物になり、悩まされ、苦しめられ、(この世は彼らの住む所ではなかった)、荒野と山の中と岩の穴と土の穴とを、さまよい続けた。さて、これらの人々はみな、信仰によってあかしされたが、約束のものは受けなかった。神はわたしたちのために、さらに良いものをあらかじめ備えて下さっているので、わたしたちをほかにしては彼らが全うされることはない。こういうわけで、わたしたちは、このような多くの証人に雲のように囲まれているのであるから、いっさいの重荷と、からみつく罪とをかなぐり捨てて、わたしたちの参加すべき競走を、耐え忍んで走りぬこうではないか。信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか。

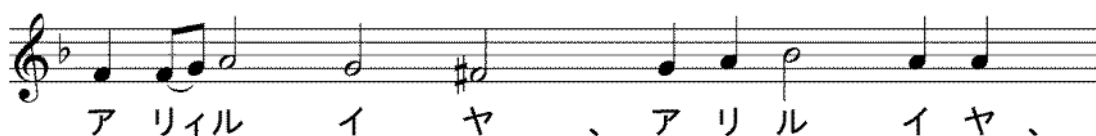
【 アリルイヤ 正教の主日の 第8調 】

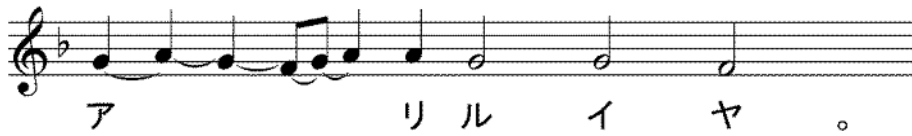
司祭) 爾に平安、

誦經) 爾の神にも、

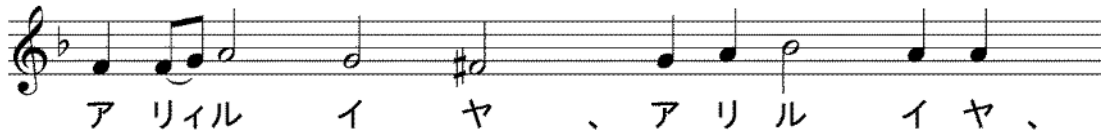
司祭) 睿智、

誦經) アリルイヤ、

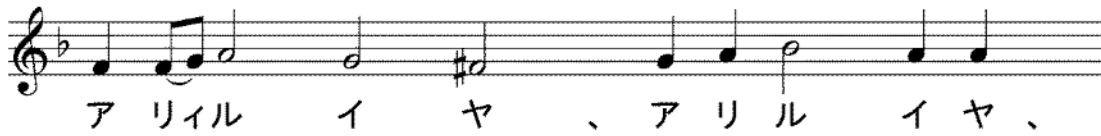




誦經) ^{しさい うち およ} 司祭の中にモイセイ及びアaronあり、^{かれ な よ もの うち} 彼の名を呼ぶ者の中にサムイルあり、



誦經) ^{かれらしゅ よ しゅこれ き} 彼等主に呼びしに、主之に聴けり、



司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ ころろ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念

^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ} 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん} 爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

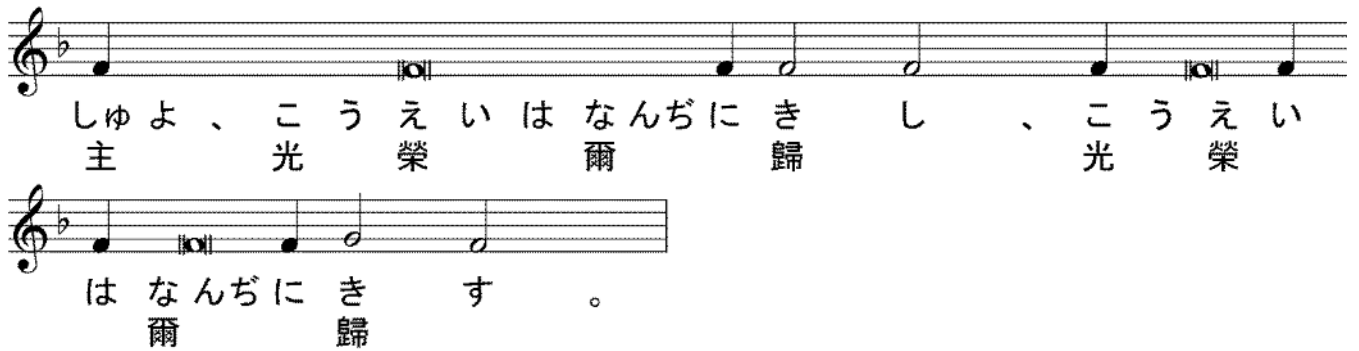
^{いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ} て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世々に、アミン。)

【 ^{エヴァンゲリオン} 福音經 イoアn福音書5端 1章43~51節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん} 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ^{でん せいふくいんけい よみ} イoアn傳の聖福音經の讀、



司祭) ^{つつし}謹 ^きみて聴くべし、^か彼の^{とき}時 ^ゆイイスス、^{ほつ}ガリレヤに往かんと欲し、^あフィリップに^{これ}遇いて、^い之に謂
ふ、^{われ}我に^{したが}従え。フィリップは^{ひと}ヴィフサイダの人にして、^{およ}アンドレイ及び^{まち}ペトルと^{おな}邑を同じ
くせり。フィリップは^あナファナイルに^{これ}遇いて、^い之に謂う、^{われら}我等は、^{そのりつぼう}モイセイが^{およ}其律法に、及び
諸^{しょよげんしや}預言者が^{しる}記しし^{ところ}所の^{もの}者に^あ遇えり、^こ是れ^こイオシフの子、^{ひと}ナザレの人、^{ひと}イイススなり。ナ
ファナイル^{これ}之に^い謂えり、^{あに}豈^よナザレより^{もの}善き^い者の^い出づる^{いわ}あらんや。フィリップ^{きた}曰く、^み來りて^み觀
よ。イイススは^{おのれ}ナファナイルの^{きた}己に^み來たる^かを^さ觀て、^い彼を^{いわ}指して^み曰く、^{まこと}視よ、^{まこと}誠に^{まこと}イズライ
リ^{じん}人にして、^{いつわり}詭譎^{もの}なき者なり。ナファナイル^{かれ}彼に^い謂う、^{なんぢ}爾^{なに}何に^よ由りて^{われ}我を^し知れるか。イイ
スス^{こた}答えて^い曰えり、^{いま}フィリップが^{なんぢ}未だ^よ爾を^さ呼ばざる^{さき}先、^{なんぢ}爾が^{いちじく}無花果樹^{した}の下に^あ在る^{とき}時、^{われ}我
爾^{なんぢ}を見たり。ナファナイル^{こた}答えて^{かれ}彼に^い謂う、^{ラヴィ}夫子、^{なんぢ}爾^{かみ}は^こ神の子、^{なんぢ}爾^{おう}は^{おう}イズライリの^{おう}王な
り。イイスス^{こた}答えて^い曰えり、^{われ}我が^{なんぢ}爾^{いちじく}を^{した}無花果樹^みの下に^い見たり^よと言いしに^{なんぢ}因りて、^{なんぢ}爾^{しん}信ず、
爾^{なんぢ}此^{これ}よりも^{おおい}大なる^{こと}事を見ん。又^{また}彼に^{かれ}謂う、^い我^{われ}誠に^{まこと}誠に^{なんぢ}爾等に^つ語ぐ、^{これ}是より^{なんぢ}爾
等は^ら天^{てん}開けて、^{かみ}神の^{つか}使^ひ等が^{ひと}人の子^この上に^う陟^{のぼり}降^{くだり}する^みを見ん。

(比較用 口語訳) イエスはガリラヤに行こうとされたが、ピリポに出会って言われた、「わたしに従ってきなさい」。ピリポは、アンデレとペテロとの町ベツサイダの人であった。このピリポがナタナエルに出会って言った、「わたしたちは、モーセが律法の中にするしており、預言者たちがしるしていた人、ヨセフの子、ナザレのイエスにいま出会った」。ナタナエルは彼に言った、「ナザレから、なんのよいものが出ようか」。ピリポは彼に言った、「きて見なさい」。イエスはナタナエルが自分の方に来るのを見て、彼について言われた、「見よ、あの人こそ、ほんとうのイスラエル人である。その心には偽りが無い」。ナタナエルは言った、「どうしてわたしをご存じなのですか」。イエスは答えて言われた、「ピリポがあなただを呼ぶ前に、わたしはあなただが、いちじくの木の下にいるのを見た」。ナタナエルは答えた、「先生、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です」。イエスは答えて言われた、「あなただが、いちじくの木の下にいるのを見た、わたしが言ったので信じるのか。これよりも、もっと大きなことを、あなただは見るであろう」。また言われた、「よくよくあなただがたに言うておく。天が開けて、神の御使たちが人の子の上に上り下りするのを、あなただがたは見るであろう」。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。
爾 歸

※ 聖体礼儀③（金ロイオン）へ